

昭和38年一乗院調査出土の軒瓦

—第17-1次

1 はじめに

奈良地方裁判所（奈良市）の建設とともに、奈文研は奈良県教育委員会から協力依頼を受け、昭和38年（1963）に一乗院敷地の発掘調査（第17-1次）を実施した。調査成果は既発表だが出土瓦の報告は概要を示すにとどまる¹⁾。以下、奈良時代の軒瓦を報告する（表26）。

2 軒丸瓦

6012Aa 瓦当側面上半は縦ケズリ、瓦当裏面には丸瓦のナデつけ痕跡が残る（図236）。

6012G 瓦当裏面に布目が残るほかは摩滅のため調整不明（以下、調整不明と略記）。

6235A ①は范傷のない0段階。瓦当側面上半は縦ケズリ、同下半は横ケズリ。瓦当裏面はナデ調整。②は范傷第2段階。調整不明。③は范傷第3段階で、蓮子、蓮弁、珠文を彫り直したものと考える²⁾。

6235J 瓦当側面は調整不明。

6239A 瓦当側面下半は横ナデ、瓦当裏面は不定方向のナデ調整。焼成は軟質（以下、軟質と略記）。

6275B 瓦当側面上半は横ケズリ。興福寺旧境内初出。

6282B 図示したのは6282Ba。調整不明。

6282G 調整不明。興福寺旧境内初出。

6284E 調整不明。軟質。

6301A 瓦当径は17.5～18.5cm、瓦当厚は2.1～3.6cm。①は范傷なし。瓦当側面上半は縦ケズリ、同下半には范端痕、瓦当裏面には布目が残る。②は范傷4段階。瓦当側面上半は縦ケズリ、下半には范端痕が残る。③は范傷5段階である。瓦当裏面にはナデ調整と布目が残る。軟質。

6301D 瓦当側面上半は縦ナデするが范端痕があり、瓦当裏面はナデ調整するが布目が残る。

6302A 瓦当側面上半は縦ナデ、下半は横ナデ（図237）。

6307J 調整不明。軟質。

6308C 一本作り。瓦当側面下半は横ナデ、瓦当裏面はナデ調整する。

6311G ①は范傷がみられない。瓦当側面と裏面は横

表26 第17-1次調査出土軒瓦集計表

軒 型式番号	丸 数量	瓦 時期	軒 型式番号	平 数量	瓦 時期
6275B	1	I-1	6645A	2	I-1
6276	1	I-1	6561A	6	I-1
6284E	1	I-1	6561B	1	I-1
6301A	41	I-1	6671A	16	I-1
6301D	4	I-1	6671E	1	I-1
6301	4	I-1	6671	1	I-1
			五重弧文	2	I-1
			重弧文	1	I-1
6012Aa	1	II-2	6663	1	II-2
6282B	2	II-2			
6282G	1	II-2			
6302A	1	II-2			
6308C	1	II-2			
6308	1	II-2	6682D	2	II-2
6311G	9	II-2	6682G	3	II-2
6311F	1	II-2			
6311	2	II	6711B	1	III-2
6235A	9	IV-1	6732E	2	IV-1
6235J	7	IV-1			
6235	5	IV-1	6732	1	IV-1
6012G	1	IV-2	6739A	1	IV-2
6239A	1	IV-2	6763C	3	IV-2
6307J	1		6733A	1	V
不明	6		6733D	1	V
計	101			46	

ナデ調整。②は珠文と圈線、蓮弁端と圈線の間に多くの范傷がある。瓦当側面と丸瓦部凸面は縦ケズリ。

6311F 調整不明。軟質。

3 軒平瓦

五重弧文 四面には布目が残るも瓦当寄りは幅4cmほど横ケズリする。頸の長さは9.7cm、頸面は横ナデ調整。

6561A ①の凹面には布目と布端の圧痕が残り、瓦当寄りは4cmほど横ケズリする。頸の長さは10.5cm、頸面は横ナデ調整。②は下端の波状文を作らない。頸の長さは9.5cm。凹面には布目と布端、側板の痕跡が残る。

6561B 幅の狭い六重弧文を型挽きで施文したのち、上から2重目に円、4・5重目に「×」を施文する。凹面は横ケズリ、頸面には縦縄タタキ痕が残る。段頸と推測する。興福寺旧境内初出。

6645A ①は瓦当幅28.5cm、頸の長さ8.3cm。凹面には側板痕跡と布端、布目が明確に残る。頸面は横ナデする。②は頸の長さ9.8cm。凹面には布目、布端が残る。

6671A ①は凹面に布目や側板痕跡が残り、瓦当寄りは幅11cmほど横ケズリ、凹面側縁は面取り。頸の長さは10.0cm、頸面と凸面は横ナデ調整。②は頸断面が曲線的で頸面に縦縄タタキがある。同様の資料はほかに2点あ

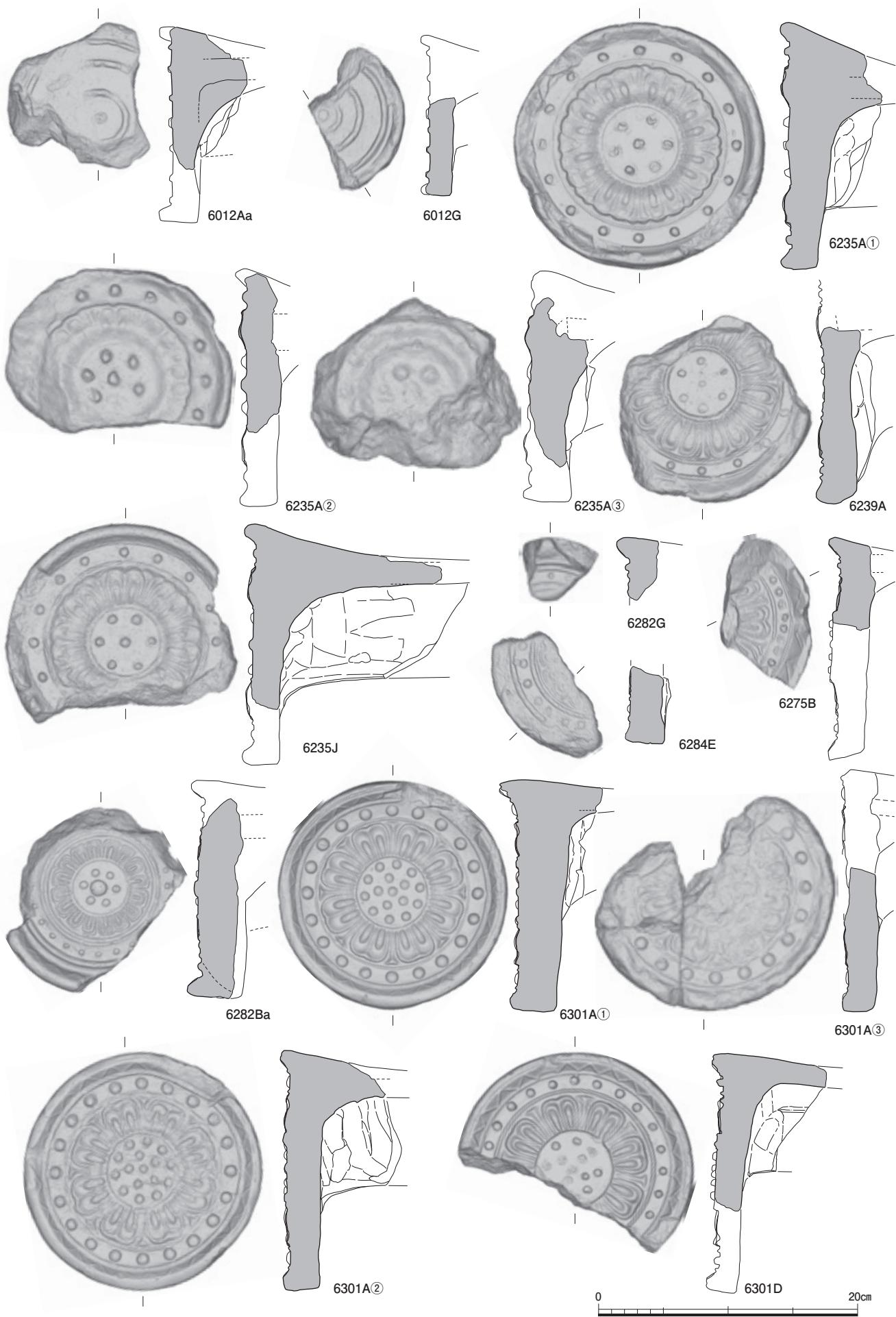


図236 第17-1次調査出土軒丸瓦 1:4

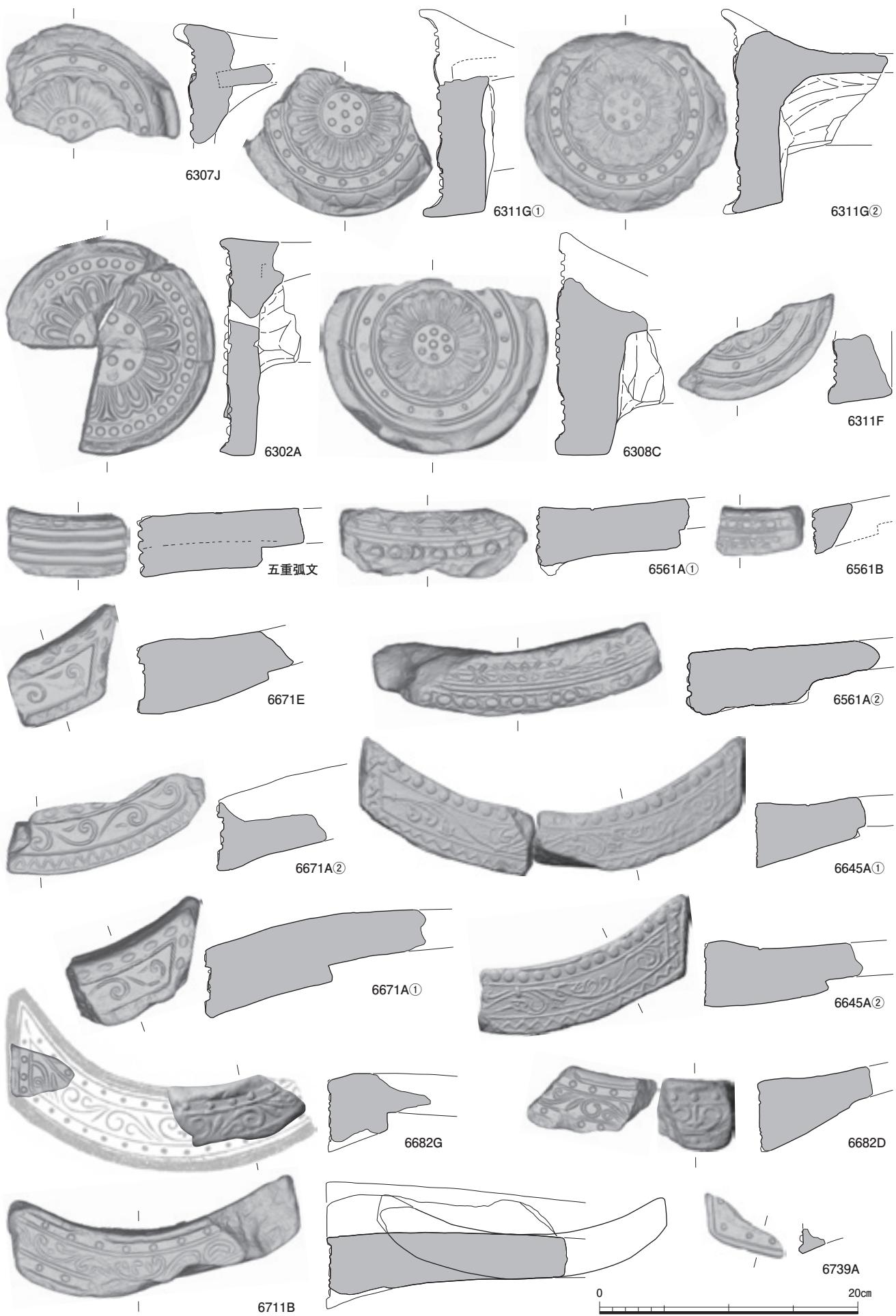


図237 第17-1次調査出土軒丸瓦・軒平瓦 1:4

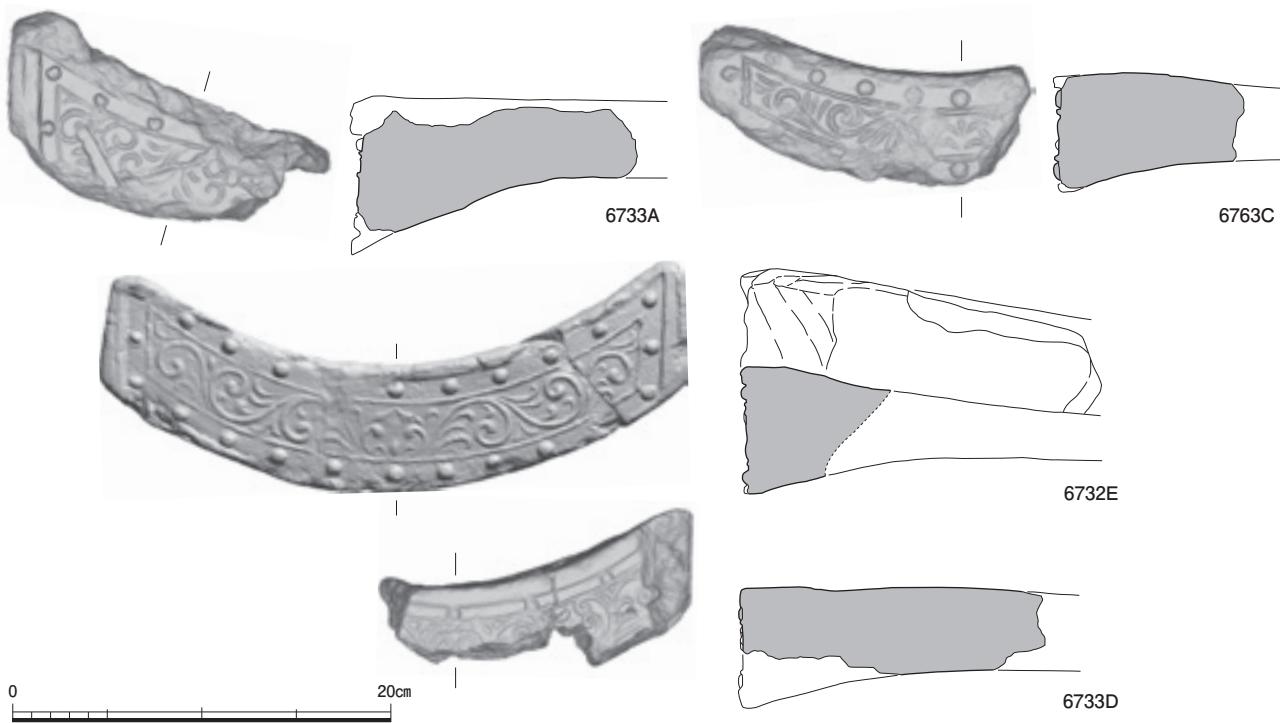


図238 第17-1次調査出土軒平瓦 1:4

りいずれも段顎である。

6671E 凹面には布目が残り、瓦当寄りは幅4cmほど横ケズリする。瓦当側面は縦ケズリ。顎の長さは10.3cm、顎面は横ナデ調整。

6682D 浅い段顎。凹面は横ケズリ、顎面は横ナデ。軟質。

6682G 細片のため調整不明。軟質。

6711B 凹面は縦ナデするも布目が残る。軟質。

6732E 瓦当幅31.0cm。凹面には糸切痕と布目があり、瓦当寄りは幅5cmほど横ケズリする(図238)。凹面側縁は面取り。顎部から平瓦凸面にかけて縦ケズリをほどこす。

6733A 瓦当面に斜方向の範割れの傷が入り、割れを接合するための鎌の圧痕が明瞭に残る。凹面は調整不明、凹面側縁は面取り、顎部から凸面にかけて縦ケズリする。同範の瓦は東大寺旧境内からも出土する。

6733D 凹面に側板痕跡がある。側板を組み合わせた凸型成形台を使用した可能性が高い。凸面は縦ケズリ。

6739A 調整不明。平城宮や西隆寺でも出土(図237)。

6763C 凹面には布目があり瓦当寄りは幅7cmほど横ケズリ、顎部から平瓦凸面にかけて縦ケズリする(図238)。別の1点は凹面の大部分を横ケズリする。

4 軒瓦の時期と出土状況

出土数がもっとも多いのは興福寺創建期の6301A-6671Aの組み合わせで同時期の6301D-6671E、藤原宮式の6275B・6276や6561Aも少數ながら出土している(表26)。

II-2期の6311Gは6682D・Gと組む可能性があろう。IV-1期の6235A・Jは6732Eと組む。V期から平安時代初頭の6733A・Dは興福寺旧境内では出土数が極めて少ない。

奈良時代の軒瓦計147点のうち75点には「基壇下」という層位名が注記されている。註1の報告1・2には基壇東半除去後に土坑を検出し、多量の土器・陶器とともに瓦も出土したとある。この基壇は天禄元年(970)の一乘院創設時期の基壇であり、その基壇東半を除去して出土したのが「基壇下」の軒瓦であろう。報告1では明記しないが、同報告第3図の網掛け範囲が土坑である³⁾。土坑の時期は元慶2年(878)、延喜4年(904)、延長3年(925)のいずれかの火災後と考えられるが、土坑出土品を含む「基壇下」軒瓦はすべて奈良時代であり平安時代の軒瓦は含まれていない。これらの軒瓦は調査で検出した一乘院創設以前の基壇建物で使用されたと考える。

本報告はJSPS科研費19H01355「3次元データによる瓦の同範認識技術の基礎的研究」2019~2021年度の成果の一部を含む。

(今井晃樹)

註

- 1) 奈文研「一乘院発掘調査概要」『年報 1964』(報告1)。奈良県文化財保存事務所『重要文化財 旧一乘院宸殿・殿上及び玄関移築工事報告書』1964(報告2)。
- 2) 今井晃樹「西大寺・西隆寺・興福寺の東大寺式軒瓦」『古代瓦研究Ⅲ』奈文研、2018。
- 3) 前掲註1の報告1・2ともに土坑の規模を東西約20m、南北約25mと記すが、図の縮尺に従えば東西約10m、南北約15mとするのが妥当である。